

じゃけんきょうまんあくしゅじょう  
邪見 驕 慢 悪 衆 生

第6組法藏寺 小林宣正

数年前の法事の際のエピソードです。お勤めが終わってから、御齋<sup>おとぎ</sup>のためにお店に行きました。その後、会食が進み、お酒も入り話が盛り上がる中、部屋の一角で言い争いが始まりました。親戚の中でも年配と思われる方同士の争いに誰も止めに入ることが出来ません。その時、その言い合いをしていた内の一人の方が「わしは〇〇高校を卒業して〇〇大学に入ったんだぞ」と周りにもよく聞こえるように、誰もが知る学校名をあげました。その瞬間、時が止まったかのように周りの空気が一変したことを今でも覚えています。

しかしながら、これはこの方の考え方が特別ということではないと思います。世間に生きていれば、誰しも人に勝ちたい、優れていたい、認められたいといった気持ちが湧いてくるのが普通ではないでしょうか。自分が努力し、その先に成功や達成がある。世間ではそうしたあり方こそが目指すべき生き方のように示されてように感じます。しかし、そうした価値観の先にあるのは、最終的には自分こそが皆から讃えられたいというあり方ではないでしょうか。

しょうしんげ <sup>じゃけんきょうまんあくしゅじょう</sup> 正 信 偈 には「邪見 驕 慢 悪 衆 生」と、<sup>おご</sup> 驕 るということに対して、厳しい言葉で私達のあり方を指摘されます。世間では知識的に賢いものとなることを良しとし、それを武器に我こそが正しいと相手を説き伏せようとしませんが、念仏者は自

ら愚かなものに立ち返って阿彌陀佛あみだぶつを称え手を合わせます。ここに他者に頭を下げて欲しいとするものと、自らが頭を垂れるものになるということの明らかな違いがあるように思います。

『蓮如上人御一代記聞書』の中では、

「とうとむ人より、とうとがる人ぞ とうとかりける」

と、法敬の尊ぶ人こそ尊いとの言葉に、蓮如上人はもつともだとうなず頷かれます。

世間の中に身を置く以上、人に勝りたい褒められたいほという心も中々なくなるものではありませんが、自らが助けられる存在として佛を称え手を合わせるといふ心を、日々の生活の中で忘れないようにしたいと思います。